
交渉事には裏がある ～ 卑怯で結構、それで世界が救えるのなら～

88式紙製装甲車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交渉事には裏がある　　↓卑怯で結構、それで世界が救えるのなら↓

【Nコード】

N76210

【作者名】

88式紙製装甲車

【あらすじ】

人界と魔界。二つの世界が交わった時、彼らは交流ではなく戦うことを選んだ。それから50年。

人族と魔族は互いに語る術を持ちながら、戦う事をやめなかった。暗殺を依頼された傭兵と魔王らしくない魔王が出会う時、

二つの世界は再び選択する機会を得た。

これは英雄の物語ではない。魔王の物語でもない。

愛と勇気の物語でもない。

現在更新休止中。期限は未定です。

「キツ、キサマツ！それでも英雄か！？」

「ええ、卑怯で結構、それで世界が救えるのなら」

第一話 魔王との邂逅（前書き）

舞台は魔法のある近代世界をイメージしています。

独裁も立憲君主制も共和制も交じり合う過渡期。

魔法があるため、旧態依然の騎士団も一部では生き残っていますが技術年代としては19世紀を想定しています。

ボルト・アクションライフルが欲しかっただけでも言う。

魔族は外見的特徴を別にすれば基本的には

人族に比べて圧倒的に力が強かったりとか魔力が高かったりとかはしません。

別に人族を見下したりもしませんし、乱暴者が多いとか言うわけでもないです。

（個人的にそう思っていたり、そう行動するキャラがいるかはともかく）

異世界の「人族」であるとするのが一番分かりやすいかと思います。

種族に関してですが、いわゆる「エルフ」を始めとした亜人に相当する種族の

ほとんどが魔族陣営となっております。好きな方はご注意ください。

結構彼らは酷い役回りになる予定ですので…

主人公達はいわゆる最強系ではありません。敢えて言うなら…反則系でしょうか？

正直、やる事が悪人のような気がしなくてもないです。

タイトルでお察し下さいという事でひとつお願いします。

第一話 魔王との邂逅

女の子「えっと、その、魔王です」

俺「え？」

女の子「いや、だから、私が、魔王なんです」

俺「H A H A H A ご冗談を」

女の子「ほんとなんですってば…」

OK、少し時をさかのぼって話を整理しよう。

俺たち人族の世界と魔族の世界がある日突然
3つのゲートという通路で結ばれてしまった。
お互い新世界を求めて偵察隊を出し…

彼らが戦いを始めて二つの世界は戦争を始める事になった。

それが50年前。

それについてどうこう言うつもりは無い。

魔族の姿は人族からすると伝承にあるような魔物のパーツに
人間を合成したような姿の者も居る。

そこまで嫌悪感を感じることもないんじゃないかと俺は思うが

中にはそうじゃない連中も居るらしい。

きつと偵察隊の中にそんな奴がいたのだ。

で、魔族は「魔王」と呼ばれる指導者の下にこつちと戦い続けているわけだ。

だったら伝説よろしく「英雄」に「魔王」を討伐させたらどうだ、と考えた阿呆が居たらしい。

で、俺はすっかり「英雄」だったので「魔王」を斬って来いといわれた。

やるからにはまず情報収集、と「魔王」について調べてみるとどーやら「魔王」といつてもいろいろいるらしく

初代が人族の前に現れてから既に38代目だという。

「魔王」がいつ頃からいる存在なのかは明確には分らないが初代を名乗る「魔王」が現れたのが

40年前だと言うからほぼ一年に一人のペースで変わっているようだ。

前線に出てきた武闘派も居れば文官肌で一切戦場には関わらなかった者、

そもそも名前しか伝わっておらず何をしたかも分からないヤツまでいるらしい。

ぶっちゃけると「初代魔王」は名乗ったところを弓で狙撃されてあっさりお亡くなりになったのだという。

どーやら伝説に言われるほど「魔王」というのはむちゃくちゃ強いというわけでもないらしい。

それが俺がその阿呆な依頼を受けた理由だったりする。

報酬も良かったし。丁度食い詰めてたし。仮にも英雄なんだけどな。

実のところ、俺の育った国、ハイデルラント共和国の首相と同じでただの最高責任者強化系じゃねえのか、って気がしないでもない。だったら殺すより親書送るなりする方が建設的なんじゃないだろうか。

まあ、それはいい。俺は別に為政者でも何でもない。明日のご飯の為に言われた通りに仕事をするだけだ。

そういうわけで、人族勢力下にある南部島嶼部ゲートを通り魔族の目を盗み、時には魔族に変装してなんとか中央山脈ゲートと南部島嶼部ゲートの中間点にあるという魔王の居城までやってきたというわけだ。

が、そこには魔王城なんていうご立派な建造物は無かった。

「ハイドリツヒ商会事務所」

看板にはそう書かれていた。城はおろか、どう見ても小さな平屋。まさか地下に向かって延々と続いているのか。

…それにしたところで、この看板は何だ？

とりあえず裏手に回ってみると、勝手口があった。

つか、開いてる。風でキィキィいつてる。

トラップを警戒しつつ近づいてみたが、どー見ても何も無い。魔術感知の魔法を唱えてみたが、魔法の「ま」の字すらない。

そしてどーしたもんかと考えているうちに

風で完全に開いてしまった勝手口の前で首をひねっていると…

気配も無く後ろから肩を叩かれた。

そしてぎょっとして振り返ると…

背後の誰か「あなた、人族ですよね？」

俺「お、お前は誰だ!？」

で、この話の頭に戻る。

今、目の前には女の子が居る。瞳が赤いから、コイツは魔族に違いない。

何でも偉い先生によるとこの世界の人族の目は赤くならないのだそう
うだ。

で、見たところ二十歳になっているかも怪しい。

華奢で小さな女の子…というには少々出るところが出すぎている気
もするが

そんな事はどうでもいい、どうでもいいのだ。

俺「お前さんが、魔王？」

女の子「はいっ」

元気に答える自称「魔王」

なんだかよく知る人間と同じくらいの高さに頭があるのでつい撫で
てしまう。

女の子「はうう、な、なにをしますかあ」

俺「H A H A H A H A、おいたがすぎるぞ」

女の子「だから、ホントなんですつてば」

俺「うんうん、で、君の名前はなんていうの？おうちはどこ？」

女の子「うう…ゲルダ…いえ、ゲイトルード・ハイドリツヒ。第3
8代魔王、です」

俺「……えーと、マジで？」

女の子「本当だって言ってるじゃないですかあ」

あたまんなか、まっしろ うん まっしろしろしろだよ うわーい

俺「つてうわーいじゃねえっ！」

女の子「はうう!？」

俺「まあ姿どうこうはいい!そういうのもアリだ!だがどこの世界に護衛も何もなしで

どこの誰とも分からないしかも敵である人族にお前は誰だと聞かれて

『はい魔王ですう』なんて言う魔王がいる!？」

女の子「こ、ここにいますう」

俺「……」

ドサクサでなんか余計なことを言ったような気がするがそんな事は
どうでもいい。

誰かこの状況を何とかして下さい。

俺は助けを求めて近くの廃屋を見上げた。

うん、あの窓から狙ってるはずの誰かさんたちがいませんね。って
いうか出てきたし。

ボルト・アクションライフルを手にしているのは俺の義姉、アリサ・
ロザノワ。

孤児だった俺を引き取ってくれたロザノワ家の一人娘。

両親は軍人で、彼女も軍人だった。

だったというのは、俺が成人を機に家を出た時に彼女も退役してつ
いてきたからだ。

口数少なく、無表情でぶつきらぼう。ライフルの腕は超一流なので
怒らせない方がいい。

1キ口先から頭を吹き飛ばされたいのなら、止めはしないが。

ちなみにさつき丁度いい位置の頭と言ったのは彼女のことだ。

童顔で俺より頭一つも小さいせいで、いつも妹と間違われるのがご
不満らしい。

一応、あれで27なんだが…立派に嫁ぎ遅れではなからうか。

もう一人の眼鏡をかけた長身の女性は、ロザノワ家のメイド長、コ
ノミ・テシガワラ。

直接聞いたわけではないが、名前からして北方のハルナ国の出身に
違いない。

アリサのお目付け役としてついてきたのだが、魔法もかなり使えるし、
薙刀を持たせたら正直俺は負ける。ホントにこの人ただのメイドなんだろうか。

姉貴もどうやら彼女の詳細な経歴は知らないらしい。薙刀や扱う魔術の傾向を見るに、
多分ハルナ国軍の軍人だったんじゃないだろうか。それが何でメイドなのかは分からない。
三十路を過ぎているらしいが、年齢の話をしても
特に本人は気にもしていないとのことだ。

アリサ「……どうしたんだ？」

コノミ「あはは、ベン君可愛い子を引つ掛けちゃだめですよ」

ああ、俺か？俺はベンジャミン。姓はない。それどころか、この名前も本当の両親から
もらったものじゃない。この戦争に巻き込まれて、死んだんだ。
でも特に気にしては居ない。そんな奴、このご時勢で珍しくも無いし、

その中で俺はかなり恵まれた方だったと自覚している。

アリサの両親は俺に本当によくしてくれた。だからこそ、これ以上
迷惑はかけられないと

俺は思っていた。腕っ節も自信が無く、魔力も人並みで
ライフルも試してみたが、センスが無いらしい。

だったら卑怯だろうがなんだろうが、頭を使うしかないだろう？

俺は家を出て、まあ紆余曲折はあったが二人の協力もあって魔族の指揮官を何人も葬った。彼らに恨みは無い。お互い様だ。俺は、自分の力で、知略で飯を食うと決めた。

その為に彼らの命を奪った。ただそれだけのことだ。気付いたら、英雄と呼ばれていたのには困ったが…

ベン「あーいやそのなんだ」

女の子「はわ〜お仲間もいらっしやっただんですね〜。私、こういう者です〜」

コノミ「あらあら御丁寧に、魔界にも名刺あるんですね」

で、硬直するコノミさん。うん、気持ち分かるよ。

俺もさつき意識がどっかに飛んで行っただし。

姉貴は名刺を覗き込んで「魔王」をいつもの無表情で見つめた。

アリス「…ゲイトルド・ハイドリツヒ、ハイドリツヒ商会代表兼第38代魔王。」

魔王と商会代表の順序、逆じゃない？」

ベン「え、突っ込むとこそこ！？」

女の子「はわわ〜、これは大変です。ミスプリなのです。

また皆さんに怒られてしまいます〜」

気付いてよかったと安堵したように胸を撫で下ろす女の子。
自称、魔王…ゲイトルード・ハイドリツヒ。

茫然自失から立ち直ったコノミさんがそっと俺に近寄って耳打ちする。

コノミ「あまりに無邪気だったのですぐには気付きませんでしたけど…」

この子、只者じゃありませんよ」

ベン「ああ…なんか、なんとなく分かるような気がする。

この子が魔王かはともかく、只者じゃないのは分かる」

コノミ「この子の魔力、桁違いです。私なんか足元にも及びませんよ」

女の子「はっわゝ聞こえてますよ」

ベン&コノミ「！」

女の子「念話でも聞こえてたと思いますけどねえ。でも大丈夫ですよ。

私、攻撃魔術は相性が悪いのか全く使えないし、防御魔術も苦手なんです」

背筋を凍らせる俺たちをよそに彼女は困ったような笑顔で続ける。

姉貴は…相変わらずの無表情だが、ライフルを持つ手が僅かに震えている。

女の子「運動神経も悪いですから、殺そうと思っているならどうぞ抵抗するだけ無駄ですから…できればあまり痛くしないでくれると嬉しいです」

だが、俺はその時気付いた。
困ったような笑顔で話し続ける彼女の手も、僅かに震えていることに。

女の子「貴方たちが私を殺すつもりで来ているのは知っていたんです…でも…」

はつきりと、彼女は体を震わせた。目にも、怯えが見て取れた。

女の子「ちょっとだけ、私とお話を、してくれませんか…？」

第一話 魔王との邂逅（後書き）

ベン「なあ」

88式「うん？どうしたんだね人族側主人公B君」

ベン「暫定設定の頃の不確定名で呼ぶな！

っていつか俺の名前はそのBから来たんだな？そうなんだな！？」

88式「まあ落ち着け。クールになれ。俺が悪かった」

ベン「まあいい…ところでこういう流れ…今のコントじゃないぞ…割とテンプレじゃないのか？」

88式「そうだろうね。これで魔王が正義は幾通りも云々とか語りだしたら完璧だね。

でもB君…じゃないベンがそういうの、分かつちゃってる奴だからそうはならない」

ベン「なるほど。別に恨みは無いとかいろいろ独白しちやってるものな」

88式「何を隠そう実を言うと魔王が一番この中で若い。ほれ」

88式、設定textの一部を見せる。

ベン「うお、19だと？外見年齢じゃないのな。俺は22か」

88式「この世界の魔族は本当に外見だけで中身はほとんど人族と変わらないですよ。

特に彼女は瞳が赤いという以外、何ら魔族的特長はないです。まあどうしてそんな子が「魔王」になってしまったかについては追々」

ベン「魔力だけは異常にあつたみたいだけだな」

88式「一応、魔王候補に挙がる子ですから。どうしてこんな家に生まれちゃったんだYO」

ベン「突っ込まないからな」
88式「おじさん寂しい…」

第二話 魔王と学ぶ世界情勢（前書き）

ベン「おい」

88式「うん？」

ベン「なんだこのぶつちやけたサブタイトルは」

88式「分かりやすいのは大事なことだつて魔王も言ってたよ？」

ベン「単に格好いいのが思いつかなかつただけだろ」

88式「そもそも各話題名とか考えるの苦手なんだよ」

ベン「うわあぶつちやけた!？」

第二話 魔王と学ぶ世界情勢

ベン「…分かった。話を聞こう」

コノミ「ベン君!？」

コノミさんが焦った表情を見せるが俺は小さく指を振った。慌てない、慌てない。

ベン「別に話を聞いてからでも仕事はできる。魔王と話すなど言われた覚えはない」

アリサ「…話を聞こうが聞くまいが、ベンにこの子が殺せるとは思えないけど」

ベン「おい姉貴、少なくとも向こうは敵意すら見せていない。

いきなり銃を向けたって何の得もしないぜ?」

アリサ「……でも、彼女は魔王、なんだろう?」

いつもの通り無表情のまま、姉貴は魔王に向けたライフルを下ろした。

渋々、というよりは安堵感が漂う声色。

姉貴は元は正規の軍人だから子供を撃たせるような真似はしたくない。

もしやるならば俺が、という気持ちはある。

できるかどうかは姉貴の言う通り、分からないけどな。

ベン「だいたいだ。魔王ってのはそもそも何なんだ？ええと…」

女の子「魔王と呼ばれるのはあまり好きじゃないんです」

ベン「ゲイトルード・ハイドリツヒさん？」

女の子「意地悪ですね…ゲイトルードは固いのでゲルダと呼んでください。」

周りからはそう呼ばれています」

おいおい魔王を愛称で呼び捨てかよ、と思ったが彼女の笑顔を見ていたら

だんだんどうでもよくなってくる。

微笑を浮かべたその姿は…そのなんだ、正直なところかわいい。黙っていれば、どこか向こうが名乗らなければ魔王だとは夢にも思わなかっただろう。

ゲルダ「魔王、というのは役職なんです」

コノミ「役職、というと？」

ゲルダ「共和国で言うなら首相、ハルナ国で言うなら

ミコガミ家の方々みたいなものです」

アリサ「…つまり、魔族の国を代表する元首なのね」

姉貴が納得したとばかりに頷く。

俺と姉貴の母国は共和制を敷くハイデルラント共和国。

コノミの母国はハルナ国という立憲君主制国家だ。

俺たちに対する調べはついていて、という事でもある。

どうやらこの魔王、可愛い顔して意外と食えないタイプらしい。

伊達に商会の代表を務めているわけではないようだ。

ちなみにミコガミ家はハルナ国を守護する霊を奉っている家で

一応、制限されているとはいえ権力はあるのだが

君臨すれども統治せず、を地で行っているらしい。

千年続く一族と言われていて、他国の王家と比べても段違いにその歴史は長い。

ゲルダ「そういう事になりますね。割と権限は強いのでどちらかというと

アイギス都市国家同盟の独裁に近い事もできなくは無いですけど」

アイギス都市国家同盟の名に俺たちは少し顔をしかめた。

あまり聞きたくはない名だからだ。

元々は南部都市国家同盟という名前だったこの組織は

諸都市の商家が議員を務め、合議制によって運営されていた。

商魂たくましい彼らは南部島嶼部にゲートが出現するや

新天地を求めて傭兵や商船隊を募り、開拓を開始した…

商売根性豊かなのは良かったのだが、魔族との全面戦争になると商業面では利益が出なくなった結果、組織の主導権を傭兵団に握られてしまい、

ヨハン・バーロット率いる傭兵集団アイギスによる事実上の独裁政治が始まった。

各商家も完全に実権を失ったわけではないがその影響力を減じている。

ヨハンは今のところ概ね公正な国家運営をしており、大陸南部地域には大きな混乱は起こっていない。

むしろアイギスが睨みを利かせることによって治安が良くなったという話すら聞く。

だが、ハイデルラント共和国や事実上の共和制となっているハルナ国からすれば

すぐそばにある独裁国家が強大な軍事力を有しているというのは決して愉快なことではないというわけだ。

アリサ「…あなたは現状に不満を抱いているように見受けられる。

だったらなぜそうしない？」

ゲルダ「簡単な理由ですよ。

私みたいに弱い魔王がそんな事をしたら暗殺されちゃうからです」

ゲルダはどうして魔王がたった40年で38回も代わりしたと思うんです？」と

苦笑しつつ付け加えた。

成るほど元々種族の違いもあり一枚岩とは言いかねる魔族連合で筋を通さずに勝手に物事を進めれば身動きが取れなくなるか物理的に首が飛ぶか…どちらにせよ魔王を退位せざるを得なくなるわけか。

ベン「…って事は今までの魔王はアホばかりだったって事か」

コノミ「ちよつとベン君!？」

ゲルダ「いえ、お恥ずかしながら正直その通りだと思います。初代魔王に至っては…」

「やーやーわれこそは魔王なり、ギャー!」なんていう出落ちに等しい最期を遂げた初代魔王。

同じ魔族として恥ずかしくなる気持ちはなんとなく分からんでもない。

ちなみにその時の戦いでは調子に乗った人族側が手痛い損害を受けて敗退したという。

なんというか、もはやコメディアンの域に達しているような気がしないでもない。

うっかり死んでいなければ

逆に人族と魔族は仲良くなれたんじゃないだろうかと思うほどだ。

ベン「いやまあ、初代はなんか、毛並みが違うアホだから。愛すべきバカというか」

ゲルダ「…そういう見方もありますね。コホン、それはともかくとして」

咳払いをするが、可愛さこそあれ、あまり威厳があるようには見えない。

だがなんとなく聞かなきやいけない気分になるのが不思議だ。これが現在の魔王、なのか。

ゲルダ「あなた方も魔界を旅する中で我々の状況を見聞きしたと思います…」。

魔族は雑多な種族で構成されていますが
特に数が多いのが御三家と呼ばれる種族です」

コノミ「魔貴族、竜族、森人ですね」

ゲルダ「はい。魔貴族は鋭い牙と赤い目が特徴の種族で

中央山脈一帯に勢力を持っています。

人族に伝わる伝承の吸血鬼のような外見ですね。別に血は吸いせんけど」

鋭い牙、とはいうものの、個人差というものがあるらしく
せいぜい少々目立つ八重歯くらいにしか見えない者もいるという。
その辺りの身体的特徴は彼らの間では特に気にされていない様子だった。

アリサ「…君は赤い目だが、特に牙が云々、ということはなさそうだが…」

ゲルダ「私はこの生まれですけど、魔貴族ではないんです。

赤目族という少数民族なんですよ」

ベン「なんというか…そのまんまナーミングだな」

ゲルダ「分かりやすいのは大事なことだと思いますよ？」

ベン「それは否定しない」

あんまりな言い方だったかもしれないが、ゲルダは特に気にした風でもない。

横でコノミがあんまり危ない事をしないで下さいという目で見てきたので

大丈夫だという風に頷いておく。早めに相手の性質を掴んでおくのは大事な事なのだ。

怒らせてしまつては本末転倒ではあるが…なんというか、遠慮というものを失わせる

何かがこの子にはあるような気がする。

親しみやすい魔王、なんていうそれこそコメディーの世界の単語がふと頭に浮かんだ。

コノミ「中央山脈ゲート…ハイデルラント共和国と交戦しているのは彼らですね」

ゲルダ「はい。ご存知の通り、魔術の扱いに長けた者が多いのが特

徴でもあります。

ただ、貴族という名を種族名に持つ通り、上昇志向な人が多いのです」

ベン「ああ、人族にもそーいう奴はいるな」

実のところ俺たちに「魔王討伐」なんていう仕事を依頼した阿呆もその部類の人間だろう。

もつとも、奴の「キズ」はツテから掴んであるので妙な態度をとるならそいつをばらまくぞと脅すつもりでもあったりする。

阿呆に使われるのはごめんだ。

ゲルダ「それゆえ、魔王選出を含め、権力闘争にあけていた時代もありました」

アリサ「…過去形なのは誰か指導者が現れたから？」

ゲルダ「…まあ、そんなところですよ」

歯切れ悪い答え。すつと目を逸らした。逸らした先に回りこむ。

ベン「実のところ、ゲルダ、君の挺入れだな？」

ゲルダ「…商売人が本職ですから。ちょっと流通関係でいろいろと脅迫紛いの要求や恫喝もしましたっけ」

ベン「笑顔で怖い事を言うなよ。というか魔王が副業でいいのか」

ゲルダ「だったら名刺のコレ、直さなくてもいいかもしれませんね」

ベン「いやそれは直しといた方がいいんじゃないのか」

ゲルダ「残念です」

全く呆れた魔王だ。とりあえず、丁度いい位置にある頭をわしわししておく。

あうあうゝなんて可愛らしい声を出しているが、嫌がっているわけではなさそうだ。

コノミがそつと視界の端で胃薬を口にするのが見えた。

正直すまんかった。いや、つい手が。そう、この手が悪いんだ。

姉貴が無表情にすつと俺の腕にしがみついてきた。こちらも頭をわしわししておく。

アリサ&ゲルダ「はうう」

なにこれかわいい。じゃない。OK、そろそろ正気に戻ろう。

コノミさんの胃のためにも。

ベン「で、竜族についてだが」

ゲルダ「はうう…ええと」

彼らは背中に伝承におけるドラゴンのような小さな翼を持つ種族です。

大陸南部に主に住んでいます。

彼らは力も強いですし高度な魔術を操る者もいます」

コノミ「あれ、でも南部島嶼部ゲートはアイギス都市国家連盟が確保していますし

島嶼部もかなり侵入されているのでは？」

復活したコノミさんが疑問を口にする。南部戦線では人族側がおし
ている、というのが

俺たちの認識で、対峙する竜族はそれほど強くないのではないかと
いうイメージがある。

南部島嶼部ゲートは海辺にあり、浚渫工事によって大型船舶の航行
も可能になった

唯一のゲートでもある。連盟海軍は海賊を取り込んだ事もあって
人族国家の持つ海軍としては最強と言われている。

アリサ「…多分、性格」

ゲルダ「アリサさんの言う通りなんです。彼らは牧歌的な性格で争
いを好みません。

他の種族と比べると出生率が低いのもその理由かもしれま
せんね」

ベン「なるほどな」

俺は南部島嶼部ゲートからここに来るまでの間に見た竜族の姿を思い浮かべながら

多分、彼女の言う通りなのだろうと思った。

渡し舟で乗り合わせた時はのん気に釣具を持ち出して船頭に怒られていたし、

草原で仰向けに倒れていたので何事かと思ったら

日向ぼっこをしている、と笑顔で答えられた事もあった。

ゲルダ「しかしながら、自分たちの生存圏を根本的に脅かされるようなら、

彼らは剣を手取るでしょう。既にアイギス海軍に対して

精鋭の空挺強襲隊が

補給路遮断の為に作戦行動を始めているそうです」

コノミ「そんな事を私たちに伝えてしまつてよろしいのですか？

彼らに伝えるかもしれませんよ」

ゲルダ「指揮しているのが竜族長ですから。現在魔界に展開している

アイギス海軍の戦力ではどうにもならないと思います。

彼の魔力は私より上ですし。

むしろ彼は逃げてくれるのを望んでいるのでお伝えしたままです」

ベン「魔王より強いのかよ」

ゲルダ「強いから魔王になるわけではないですからね。ちなみに魔王というのは通称で

魔族連合最高責任者、が正式な呼称なんですよ？長いので誰も使いませんけど。

ちなみに私は人材不足と泥沼の権力闘争の末に

「もうこいつでいいや。どこの陣営でもないし」という理由で選ばれたそうです」

ベン「そんなノリで国家元首決めていいのか？」

魔界の実情を聞くにつれ、「魔王」の意味が明らかになるにつれ、俺は馬鹿らしくなってきた。

こんなちゃらんぼらん相手にも50年も人族は戦い続けていたのかと。

ちよつと顔を突き合わせて話をしてみれば

10分後には肩を組んで笑い合っているのではないだろうか。

アリサ「…で、最後は森人？」

ゲルダ「はい。性格には彼らは種族、というよりは狩人の作った組織なのですが

多くは尖った耳を持っています。

あなた方の伝承における森の精霊に姿は似ていますね。

北部は寒い気候ゆえに農業も発展せず、狩猟がほとんど唯一の産業なんです」

コノミ「ハルナ国でも農業は低調だけど、軽工業や魔法産業がある

から…ね」

ベン「しかし狩猟だけじゃそう多くの人間は食っていけないだろ？」

ゲルダ「その通りです。人口が過剰になってきて問題になっていたのですが」

そこにゲートが開きこれ幸いと彼らは人界に侵攻を開始してしまっただんです」

ベン「食うために、か」

ハルナ国は偵察隊同士の衝突から時をおかずして彼らと戦いを始めた。

しかし逆侵攻をするだけの兵力はハルナ国にはなく北部ゲートは現在も魔族軍の支配下にある。

ハルナ国軍は都市近郊に二重三重の防御陣地を構えており魔族軍の攻撃により散発的に戦闘が発生しているが50年間、都市部への侵攻を許していない。

防御力に限って言えば、ハルナ国軍は人族軍最強とも言えるだろう。

ベン「なるほど連中が魔族の中では最も積極的に仕掛けてくる理由が分かったな」

ゲルダ「現在では軍需産業が主力ですから

やめるにやめられなくなってしまうともいえます」

コノミ「戦争をやめたら職を失って人が死ぬ…ということですか」

アリサ「…いびつな社会構造ね」

ゲルダ「どの道、ゲートが繋がらなかったとしても

あのままでは魔界では戦争が発生していたと思いますよ」

ベン「それはこっちにも言える事だ。

ヨハンは元からクーデターを計画していたらしいからな」

今では魔族軍という共通の敵がいるからこそ列強三国は協力しているが

彼らがいなければどうなる事か。

都市国家同盟は商売最優先で目先の利益でコロコロ態度を変える。
ハルナ国だって主力の輸出産業が経済封鎖を受ければ軍事力による
恫喝も辞さない。

共和国は中央に挟まれた土地柄、という事情があるにせよ軍備増強
に余念がない。

ベン「どっちみち、どちらの世界もそのまま平和ではいられなかつ
たって事か」

ゲルダ「そうでしょうか？」

ため息をつく俺にゲルダは不思議そうに首を傾げた。

ゲルダ「交渉次第で、お互い納得のいく決着がつけられると思うんですけどね」

コノミ「ですが、戦争も一種の外交で、交渉手段の一つですよ？」

アリス「…最低の手段だけどね。どうしようもなくなった時の、最後の手段」

ゲルダ「大事なのは、多くの人にとって納得のいく決着をつけてしまふ事だと

私は思っているんです」

ベン「確かにな。誰もが納得する理由さえあれば

ゴリ押ししようとする奴を周りが止めるようになる」

だが、もちろん歴史にはその逆だつてある。誰もが納得するような理由で

民衆を味方につけ、自分の意見をゴリ押ししようとした奴なんていくらでもいる。

その結果は、大抵碌なことにならず、民衆を巻き込んで自爆する事がほとんどだ。

だから、俺は小剣を抜いて、「魔王」に突きつけた。姉貴とコノミさんが息を呑んだ。

「魔王」は…ゲルダは、びくつと震えたが、それでも俺の目をじっと見返してきた。

ベン「あんたは本気で“先導者”になるつもりがあるか？

“扇動者”にならない自信はあるか？」

ゲルダ「あなたが私を“扇動者”だと思うならいつでも斬り捨ててしまって構いません」

躊躇無く、彼女は答えた。

護衛もつけず、彼女は一人で、俺たちを迎えた。斬られる覚悟も、していた。

だったら、俺は…

俺は彼女に向けていた剣先を返し、胸の前で剣を立てた。

ベン「いいだろう。あんたの手助けをしてやる。この世界を納得させてみる」

コノミ「ベン君!？」

アリサ「…コノミ、ベンは本気だよ」

姉貴はいつもの通りの無表情で。コノミさんは仕方ないですね、と
呟ささやき笑顔で頷うなづいた。

ゲルダ「……本当に、いいのですか？裏切り者と呼ばれてしまいま

すよ?」

ベン「ああ、それなら安心しろ。俺は英雄って呼ばれてるが

「暗殺者」とか「ネズミ」とも呼ばれてる。悪名には慣れてる。

姉貴とコノミさんは付き合わなくてもいい。これは俺の決断だ」

アリサ「…家族なのに水臭い。ベンはいつもそうだ。少しは私たちを頼れ」

コノミ「私はロザノワ家のメイド長ですから。…それに、楽しそうじゃないですか」

ホント、お人好しだな。分かってる。

でもさ、自分よりお人好しそうな奴を、見つけちゃったんだ。

俺は、ただただ、二人に頭を下げるしかなかった。

だから、俺は気付かなかった。彼女の眩きに。

ゲルダ「羨ましい…ですね」

第二話 魔王と学ぶ世界情勢（後書き）

コノミ「ご苦勞様です。紅茶をどうぞ」

88式「ああ、これは御丁寧に。丁度喉が渴いてたんですよゴクゴクプハア」

コノミ「あらあら」

88式「今回のゲストはコノミさんです。眼鏡メイドです」

コノミ「後ろの説明は必要なのかしら」

88式「大事なことなので。眼鏡メイドです」

コノミ「あっさりベン君、魔王の配下に下ってしまいましたねえ」

88式「他人事だな君も一緒にだろう」

コノミ「私はメイドですから」

88式「便利だなその言葉。交渉に使えないだろうか」

コノミ「答えたくない時の言い訳には使えますよ」

88式「まあいい。というか配下になるとは言っていないぞ」

コノミ「人族サイドから見ると似たようなものかと」

88式「そうでもないかもしれない。君らが魔界に行ったの知ってるのは

阿呆な誰かさんと極一部だけだし」

コノミ「失敗した時知りませんと言いつ張るためですか」

88式「そういう事。知ってるのがメイドだけならメイドですからで済むんだがな」

済みません

88式「お前の恥ずかしいことをばらされなくなかったら…うん最悪だな！」

コノミ「その結果やらされた事で民衆から支持されて気分良くなっ

たら

忘れそうですけどね

88式「うんぶっちゃけそう。そういう方向でこの話は多分進んでいく」

コノミ「あいつらは嫌いだけど言う事聞いたらうまくいくからいいや」ですか

88式「根に持つ奴は根に持つからそう単純じゃないけどね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7621o/>

交渉事には裏がある　～卑怯で結構、それで世界が救えるのなら～

2011年1月20日02時40分発行